

わが国の「老衰死」の過去・現在・未来

丸井 英二¹⁾, 杉田 聡²⁾, 田中 誠二³⁾¹⁾人間総合科学大学, ²⁾大分大学医学部, ³⁾新潟大学人文社会・教育科学系

背景と目的

「老衰」は平成29年度には全死亡の7.6%を占め、わが国の死因順位の第4位となった。しかし、たとえばアメリカでは老衰死は死因統計上ほとんど皆無である（全死亡の0.1%未満）。かつて疫学や保健統計における認識では、死亡統計からみたとき「老衰」ならびに「死因不明」が少ないほど、国としての医療の質が高い、と考えられていた。その視点からすると、わが国の「医学水準」と「医療水準」と照らし合わせて、「老衰」が死因としてこれほど上位にあることは西洋諸国から見ると信じがたい事実である。死因は科学的のみならず社会や文化によって大きく影響される。本研究では、「死因としての老衰」について、わが国の人口動態統計をもちいて経年的ならびに地域的な変遷と特徴を明らかにしていきたい。今後、さらなる高齢化ともなつてわが国の歴史的、文化的背景のもとで生じてくる「死因としての老衰」の増加とその問題点について明らかにし、今後の対応を検討することを目的とする。

資料：明治32年から現在に至る人口動態統計について、厚生統計協会の「人口動態統計（明治32年～平成9年）」ならびに厚生労働省のホームページに掲載されている統計表を参照し解析をおこなった。

結果と考察：「老衰」による死亡は1899年（明治32年）の人口動態統計以後、戦前はほぼ6%前後を維持していた。そして、戦後の「老衰死」はいったん低下を続け、全死亡に占める老衰死の割合は1950年の6.4%から2000年の2.2%へと低下した。しかし、その後は上昇を続け、2015年には6.6%にまで上昇し、2017年には7.6%となった。これは、もちろん人口の高齢化を反映していることはいままでもない。そして、将来的にはさらに上昇する可能性がある。

男女について比較すると、つねに女性の割合が高い。年齢別に比較してもつねに女性が高いことは注目に値する。また、死亡場所との関連では、近年では病院での死亡にも老衰が多くみられる。自宅での死亡では、全死亡の10%程度であるが、病院では3%、診療所では9%と高い。もちろん老人ホームでは約30%が「老衰」という死亡診断である。

伝統的に「老衰」は医学的に死因としては不適當であるといわれてきた。その背景には、医学として死因を科学的に特定できないことは恥すべきことであり、「医学の進歩」により人間の死亡の原因は還元論的に追及することで解明できるという楽観的な進歩的科学主義があった。そのため、死亡統計としての質の高さは「老衰」ならびに「死因不明」が少ないことによって評価されるという歴史的事実があった。アメリカ合衆国をはじめとする西欧諸国で「老衰死」が極端に少ないことは西欧的な医学主義のあらわれでもある。

「老衰」は昔からの死因の一つであるにもかかわらず、正面から医学的・医療的に取り扱われることはなかった。それは自然科学の対象となりにくいからであり、文化的に規定される現象であるからであった。東洋では老衰をひとつの完成形としてポジティブにみる一方、西洋では排除すべき死因不明のひとつとして扱われてきた。こうした科学的なアプローチだけでは片づかない文化的価値観のからむ問題として「老衰死」を取り扱う必要がある。